

# 美術科教育学会通信 No.61

2006年10月15日発行

通信事務 代表：〒772-8502 鳴門市鳴門町高島字中島748番地

鳴門教育大学芸術系（美術）講座 橋本幸幸研究室 / Tel. & Fax. 088-687-6481 / E-mail : hasimoto@naruto-u.ac.jp

企画・編集：山木朝彦 / Tel. & Fax. 088-687-6485 / E-mail : yamaki@naruto-u.ac.jp

編集レイアウト：山田芳明 / Tel. & Fax. 088-687-6636 / E-mail : yyamada@naruto-u.ac.jp

企画協力：山田一美（東京学芸大学） WEB版：谷口幹也（九州女子大学）

## 美術教育研究とコミュニケーション

副代表理事（研究部担当）・学会誌編集委員長  
永守基樹（和歌山大学）

山上の私の仕事場では、山を覆うような虫の音を聴く季節となりました。虫の音もコミュニケーションなのだそうですが、近年、美術教育において「コミュニケーション」が、いっそう重要なものとされつつあるようです。子どもの造形活動の意味論的再把握や、社会的コミュニケーションやリテラシーの観点からの鑑賞教育研究などは研究の焦点のひとつです。考えてみればコミュニケーション性は芸術の本質。いまさら強調されるのも妙な話ではありますが、美術表現のあるモードが崩壊していくときに、美術の諸活動をコミュニケーションという、より基礎的な地平から考えることは、おそらく正しいことなのでしょう。

ところで、私たちの学会での研究活動もコミュニケーションであることに違いはありません。その主要なメディアのひとつは学会誌ということになります。そしてここでのコミュニケーション活動も美術教育実践と同様に困難で本質的な問題を見せています。例えば学会誌（という同人誌的媒体）での論文の著者と読者の基本関係に「引用」がありますが、投稿論文に過去の学会誌掲載論文が引用されることは、他の分野と較べてかなり少数であるようです。ある研究が他の多くの研究を生み出していくことから「学（＝ディシプリン）」なるものは形成されるという考え方があります。美術教育学に自然科学のようなディシプリンを見出せないのは当然とは言え、多様な動きをしっかりと見つめ、そこにいくつかの結節点やベクトルを見ていく努力は持続すべきでしょう。

今期の研究部と学会誌編集委員会では、学会誌掲載論文を対象とした「『美術教育学』賞」と「レビュー」を活動の中核に位置づけてきました。それは学会誌を舞台として、実践と研究、現場（教師）と研究機関（研究者）、研究者相互など、多相なコミュニケーションを活性化し、美術教育研究活動のなかにひとつの絆を形成していくことを目的としています。それは困難なことですが、例えば学会誌第26号より掲載されているレビューでは、気鋭の研究者によって、共有すべき研究への視点や相互批評の方法が提言され試みられています。

それは学会における「対話の方法」の提言だとも言えるでしょう。美術教育研究は、本質的に実践的な性格を有しており、子どもや学びの場と切り結ぶ潜在的な力を持つ必要があります。そしてその言説が一定の共感や社会的広がりを持つことが求められます。伝統的で強固なディシプリンを持つ学問でなら「20年後の読者」を期待できるかも知れませんが、私たちには現前の子どもの学びの場へのメッセージを底に持つことが求められています。そのためにも対話＝コミュニケーションのなかで自らの言葉を鍛えることが不可欠な作業となりましょう。どうやら私たちは美術教育「学」の成立と解体を同時並行的に行う宿命を持っているようですが、その成立も解体も対話の中にあればこそ一定の歴史を形成することにつながるのだと考えています。今後ともご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

# 第 29 回美術科教育学会 金沢大会【第 1 次案内】

美術科教育学会 金沢大会事務局代表 鷺山 靖 (金沢大学)

金沢大会は 3 月 25 日 (日), 26 日 (月) に金沢大学教育学部で開催いたします。

1. 大会テーマは「美術教育研究の不易と流行」です。

近年の大会テーマに掲げられた「危機」(19, 20 回), 「越境」(22 回), 「更新」(27 回), 「変革」(28 回) といった時代のうねりは, 新たなうねりを伴って絶えず私たちに打ち寄せています。新たなうねりの波頭が視野に入った今, 「不易と流行」の観点より, 私たちの美術教育研究と学会を捉え, 更なる美術教育の学的確立とその深化を追求する金沢大会にします。

2. 学会の原点を大切にします。

(1) 口頭発表: 申込と発表概要原稿提出の締切日をできる限り大会開催日に近づけました。

以下サイトより, 各種書類のダウンロードができます。奮ってご発表下さい。

<http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~washi/>

(2) 懇親会: 大会参加者のネットワークを推進する懇親会を目指します。

※ 特に学生が同じ研究テーマの学会員と出会う懇親会を目指します。

どうぞ, 早春の金沢においで下さい。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

## <第 29 回美術科教育学会金沢大会の概要>

■会期: 平成 19 (2007) 年 3 月 25 日 (日), 26 日 (月)

■会場: 金沢大学教育学部 (JR 金沢駅東口 93,94,97 番バス乗車, 「金沢大学」バス停下車)

■大会テーマ: 「美術教育研究の不易と流行」

■日程 (予定): 3 月 25 日 (日) 午前 (受付, 開会行事, 研究発表), 午後 (研究発表, 懇親会)  
3 月 26 日 (月) 午前 (総会, シンポジウム), 午後 (研究発表)

■研究発表申込: 同封案内書を参照。http://www.ed.kanazawa-u.ac.jp/~washi/ で閲覧可能。

申込方法: 申込書, 返信用封筒 (2 枚), 返信用ハガキ (1 枚) を下記宛に郵送。

申込締切日: 平成 19 (2007) 年 2 月 2 日 (金) 必着

郵送先: 〒 920-1192 金沢市角間町 金沢大学教育学部美術教室

第 29 回美術科教育学会金沢大会事務局 鷺山靖

※参加申込方法については, 次号通信で詳細をお知らせいたします。

※連絡・問合せ先 E-mail [washi@ed.kanazawa-u.ac.jp](mailto:washi@ed.kanazawa-u.ac.jp) (鷺山)

TEL 076-264-5584 (鷺山)

※ 電話による連絡・お問い合わせはできる限りご遠慮ください。

# 2006(平成18)年度第一回定例理事会報告

開催日時:8月26日(土曜日)午後1時から午後6時まで

開催場所:東京外国語大学本郷サテライト7階会議室

(住所:東京都文京区本郷2-14-10)

本年度の第一回定例理事会が理事19名の出席(3名の欠席)によって開催されました。例年通り本学会が直面するいくつかの議題について理事が協議するとともに、各部からの報告が理事に対して行われました。本年度は、学会役員改選選挙を行う年度となっており、主としてこのことについて原理的、実務的な検討と確認が行われ、潤滑かつ万全な選挙の実施に向けて態勢を整えることができました。議題と報告の項目と内容については、下記の報告(記録)をご覧ください。なお、この報告(記録)は各部代表の副代表理事が記録し、代表理事および副代表理事が相互に確認したものです。

## 1. 総務部関連事項

### 議題

#### a 学会役員改選選挙について

前回の選挙管理委員会委員長の説明を基に協議し、山田一美理事を委員長に決定した。今後、委員長を中心に選挙管理委員会が、次期理事選出に向けて活動していく。なお、選出規定について、代表理事を中心に検討を重ねて行くこととした。

#### b 新入会員について

本年4月以降、19枚の入会希望書が提出され、全員了承された。

### 報告事項

#### a 平成18年度会費納入状況について

平成18年度会費納入状況は、7月末現在で、正会員236口、賛助会員2口である。

#### b 日本学術会議関係について

既にお知らせしたように、日本学術会議は2005年10月から新体制に移行し、本学会は「日本学術会議協力学術研究団体」になった。また、従来の「研連組織」に代わり、教育学関係は「教育学関連学会連絡協議会」に所属しているが、現在大きな動きはない。芸術学関係は「芸術学関連学会連合」に所属し、芸術学関連学会連合発足の会とシンポジウム「芸術の変貌/芸術学の展開」が本年6月17日に東京で行われた。

## 2. 研究部関連事項

### 議題

#### a 『美術教育学』賞選考委員長の選任

橋本代表理事より規定に基づき長田謙一理事(首都大学)を選任することが提案され承認された。

## 報告事項

- a 学会誌投稿要領の一部変更について  
主として註記の方法の指示を中心に、若干の投稿要領の改訂を行った。
- b 学会誌第 28 号公募投稿状況  
昨年に比べて若干増の見込み。この 3 年で連続して微増傾向にある。
- c 査読について  
昨年に引き続き理事を中心に必要な人選を編集委員会で行い依頼する予定である。
- d 実践研究プロジェクトについて  
新井哲夫座長より進捗状況と最終年度報告書作成の見通しが報告された。
- e その他  
学会誌査読に関する異議申立に関して学会誌編集委員会内規が設定された。

## 3. 事業部関連事項

議題 なし

### 報告事項

#### a 東西地区会研究発表会について

今年度の東西両地区の実施計画について宮脇、花篤両理事から報告があり、今後通信等で情報発信・連絡を行っていくことが確認された。また、これまでの東西地区会のテーマを集約し広報することが、宮脇理事の提案を受けて了承された。(具体的な研究発表会の予定については、それぞれの担当者より広報される。)

#### b InSEA 世界大会共催に関わる寄付について

InSEA 世界大会準備委員会が JNTO(国際観光振興機構)を通じて募金事業の免税措置の手続きが完了したことに合わせて今年度の振り込みを行う予定である。

## 事務局より

### 新入会員紹介

若山 育代(東京学芸大学大学院), 千 凡晋(東京学芸大学大学院), 鈴木 美樹(福島学院大学), 足立 彰(京都教育大学京都中学校), 倉科 勇三(芦屋市立美術博物館), 塚田 美紀(世田谷美術館), 中村 真規子(山梨大学教育人間科学部附属中学校), 平木 茂(国土館高等学校), 古田 啓一(岐阜県美術館), 一條 彰子(東京国立近代美術館), 藤田 雅也(東郷町立東郷中学校), 守屋 建(東京学芸大学附属大泉小学校), 辻 誠(佛教大学・京都西山短期大学), 浅野 卓司(桜花学園大学), 三宅 千恵(大阪教育大学大学院), 松尾 豊(高岡第一高校), 神保 亮(兵庫教育大学大学院), 津田 由加子(兵庫教育大学大学院), 濱野 俊彦(昭島市福島中学校), 藤井 康子(東京学芸大学大学院連合学校教育研究科), 安木 理恵(神戸大学大学院), 細谷 誠(東京造形大学), 高橋 浩二(四国中央市立中曾根小学校), 山田 洋揮(名古屋市立楠中学校), ペルトネン 純子(富山大学)

### 地区会情報 第 13 回西地区会 inSAKAI

#### 「サカイスタイルの美術教育」(仮)

日 時: 平成 19 年 2 月 4 日(日) 午後 1 時より 5 時まで

会 場: 堺市役所本館 3 階大会議室

参加費: 500 円

## 報告 第12回東地区会+静岡大学教育学部美術教育講座

日時：2006年7月22日（土）

会場：静岡大学

テーマ「『連携と創造』に基づく美術教育の可能性」

The logo consists of the letters 'W' and 'E' in a stylized, serif font, with an ampersand '&' between them. The letters are white and set against a dark background.

平成18年7月22日（土）、静岡大学にて、「『連携と創造』に基づく美術教育の可能性」というテーマを掲げ、第12回東地区会を開催いたしました。開催に当たっては静岡大学教育学部美術教育講座と同大学教育学部附属校の連携・協力のもとで行い、当日は、美術科教育学会会員のほか、地域の学校の諸先生方、静岡大学の院生・学部生など、60名ほどの参加がありました。第一部の実践報告から第二部の対談講演まで繋がりのある内容で進み、お陰様で充実した会となりました。ご協力をいただいた皆様には厚く御礼申し上げます。

さて、同地区会のテーマとなった「連携と創造」とは、静岡大学教育学部美術教育講座の教育と研究の取組みにおいて、近年掲げてきたテーマでもあります。地区研究会を通じて、この「連携と創造」から、どのような美術教育の可能性が生まれるのかを考えようと試み、第一部では地域の美術教育の活性化を促すことを目的とした研究誌『FILE』（静岡大学教育学部美術教育講座発行）の取組みをもとに、各自が連携を柱としつつ異なる立場からの発表を行いました。会の導入として、はじめに芳賀正之が、①大学と附属校の共同研究のあり方、②地域の学校との連携による研究の取組み、③教科教育と教科専門との連携・協力による静岡大学の美術教育の現状について発表しました。それを受けて実践報告へと入り、村松裕幸氏（附属島田中学校）が昨年度、試みた「命の面」の授業実践を例に、附属校からの立場で大学と附属校の連携と、そして地域の公立学校との連携について発表しました。続いて、鈴木秀幸氏（元附属浜松中学校）が、美術館学芸員との連携による美術の授業についての実践を発表しました。さらに第一部の後半においては、静岡大学大学院生と大学教員との連携による教育・研究活動とその取組みについて、二つの実践を紹介しました。一つは大学と美術館との連携によるワークショップ、もう一つはショーウィンドウディスプレイ制作、つまり産学協働の試みです。こうした授業外での制作ないし美術教育の活動を通した中で、美術・デザインや美術教育というものが地域社会とどのように関わっていけるのか、その可能性を追求した大学院生等による実践的な発表内容でした。

第二部では、「美術教育運動の過去・現在・未来」というテーマで、講師に宮脇理先生と橋本泰幸先生を迎え、対談講演のような形式で行いました。対談講演の流れとしては、はじめに戦前の美術教育運動、特に明治期の図画教育から大正期の自由画教育運動が起こるまでの流れについて、橋本先生に語っていただき、それを受け、宮脇先生に戦後（1945年以降）の美術教育運動、特に占領下の時期から民間美術教育運動が生まれていくまでについて語っていただきました。美術教育運動の歴史、その意義などを踏まえ、後半においてフロアーからの質問も飛び交い、ディスカッションのような形式へと展開していきました。最後にお二人の先生に、新鮮かつ刺激を受けるような、ご提案とも受け取れるような内容で新たな美術教育の可能性を探るための展望を語っていただきました。参加された方々からは好意的な感想をいただくなど、有意義な会となりました。

（文責：芳賀正之）

テーマ「地域文化と現代美術」

日本の地方では「現代美術」を紹介する場が少なく、「美術」を特別なもの、自身の生活とは関係のないものと考えている者も多いのが現状です。そこで福島大学の絵画研究室では、学生、院生とともに「福島現代美術ビンナーレ」を企画し、美術展や関連企画のシンポジウムを通して、地域との連携活動を推進してきました。

先回のシンポジウムは、大学で様々な教育を実践されている諸先生（東京芸術大学・布施英利先生、新潟大学・柳沼宏寿先生、北海道教育大学・佐藤昌彦先生）をパネラーにお迎えし、学校と地域社会との関わりについて話し合いました。今回は、狭義の「美術」関係者だけではなく、「芸術」制作者の幅広い視点から、地域住人の方々とともに、地域との接点や、今日における「美術」表現や「美術教育」の課題について考えていきたいと思ひます。

日時： 2006年 10月7日（土）13:00～16:00

会場： 福島県文化センター 小ホール

受付： 12:00～

●パネラー：佐垣慶多（福島大学大学院教育学研究科在籍。石川県出身。福島大学卒業。  
モダンアート展 協会賞・損保ジャパン美術財団奨励賞受賞。）

中村文則（小説家。愛知県出身。福島大学卒業。

新潮新人賞受賞、野間文芸新人賞受賞。芥川賞受賞。）

平山素子（コンテンポラリーダンサー、振付家。愛知県出身。筑波大学大学院修了。

世界バレエ&モダンダンスコンクールにて、モダンダンス部門金メダル。  
ニジンスキー賞受賞。中川鋭之助賞受賞。）

和合亮一（詩人。福島県出身。福島大学大学院修了

詩集「AFTER」で中原中也賞受賞。詩集「誕生」で現代詩花椿賞受賞。

詩集「地球頭脳詩篇」で土井晚翠賞受賞。）

●コーディネーター：渡邊晃一

●アドバイザー：宮脇理

問い合わせ先：福島大学 人間発達文化学類 文学・芸術学系 絵画研究室

Tel & Fax：024-548-8226 E-mail：koichiw@educ.fukushima-u.ac.jp

テーマ 「〈三十歳〉 目前の「造形遊び」を磨く」

—Do (行為), 現在性, 出会いと陶冶, 小中連携, 図画工作・美術教育政策—

コーディネーター 奈良教育大学 宇田秀士

<テーマについて> 本西地区会は、第5回西地区会<研究発表会 in 奈良>の成果をふまえ、「造形遊び」を磨き光らせていくために、第I部<「造形遊び」の先達へのロング・インタビュー>、第II部<各校種教員として日々感じている想いからの考察>の2部立てとしました。<美術教育実践の歴史>と<美術教育の批評>の2方向から光をあて、「造形遊び」の現在、過去、未来を描き出していきたいと考えています。

<1, 日時> 平成18(2006)年12月23日(土) 午後12:30~17:30

(受付12:00-12:30)

<2, 会場> 543-0054 大阪市天王寺区南河堀町4-88 大阪教育大学天王寺キャンパス中央館  
2階215大講義室B

<3, 参加費> 500円-1000円(当日配布研究冊子代)

<4, 内容>

・12:30-12:40 はじめの挨拶 花篤實(学会西地区会統括理事・大阪芸術大学教授)

第I部 12:45-13:45 [ロング・インタビュー]この人にきけ!!

-若き日の実践, Doの会, 美術教育行政, 未来

三澤正彦氏(大阪市立南小学校長, 学習指導要領解説作成協力者)

今西 榮氏(大阪府門真市立北巣本小学校教頭)

第II部 13:55-17:20 [研究発表会]と[討議会]

・13:55-14:15 趣旨説明—第5回西地区会の成果, 「造形遊び」に対する批評的論述  
宇田秀士(奈良教育大学助教授) 発表後は, 司会

・14:20-14:40 小学校の現場から—推進の視点, 小中連携の視点

岡田陽子氏(大阪府南河内郡河南町立石川小学校教諭)

・14:45-15:05 中学校の現場から—小中連携の視点, 主体的な活動の視点

人見和宏氏(滋賀県大津市立粟津中学校教諭)

・15:10-15:30 大学の現場から—現状をふまえて

吉田貴富氏(山口大学助教授)

・15:40-17:20 発表に対する質問・意見交換と参加者全体での討議会

指定質問者・討論者 尾西啓充氏(奈良県生駒市立生駒南第二小学校教諭)

十林真紀子氏(和歌山市立有功中学校教諭)

竹本封由之進氏(大阪大谷大学助教授)

・17:20-17:30 終わりの挨拶

サポートスタッフ 岩崎由紀夫(学会西地区会担当理事・大阪教育大学教授)

福本謹一(学会西地区会担当理事・兵庫教育大学教授)

永守基樹(学会理事・和歌山大学教授)

<5, 申込先・問い合わせ先> 630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 美術科教育第2研究室

宇田秀士 TEL・FAX 0742-27-9223(研究室直通) Eメール udah@nara-edu.ac.jp

HP:<http://mailsrv.nara-edu.ac.jp/~udah/udaken/Designs/Untitled%20Design%20/gakkai.html>

交通アクセス, キャンパス地図など詳細は, 同封の案内ちらしをご覧ください。





なものと言えると考えるからです。「現場（今・ここ）」を強調することは、非歴史性を強調することでもあります。

一方、「教育」についてですが、教育の対象となる「子ども」をどう見るかという「子ども観」は、子どもを制度の枠組みに入れる行為といえるでしょう。子どもをどのようにとらえるのかによって、大人の子どもの対する振る舞いは変わってきます。そこに、「時間(歴史性)」が加わって「教育」が成立します。今の子ども像をとらえ、未来の(あるべき)姿を思い描くからです。その際に、歴史性重視の成果としての子どもの発達段階を考慮し、教育は過去から未来に向かっての延長線を描くための、もの差しのような役割を果たします。それゆえ、過去に描いたビジョンを重視し、中途の思いがけない出会いや突発的出来事を捨象しがちになります。しかし、仮説に基づいて実践し、後に評価するという態度は、反証可能性を持った教育科学としての教育学には不可欠なものと言えます。

「美術」と「教育」が、以上述べたような特性を持っていたとすれば、美術教育、美術教育学をどのようにとらえていけばよいのかということ自体が研究テーマにもなります。

「美術と教育のはざま」『アートエデュケーション』28号

「美術教育学」というモチーフを描く私たち」『美術教育学』24号

そこで、私は制度の枠組みを保留し続けていくという態度と制度の枠組みの中で折り合いをつけていくという二つの視点で取り組んでいくしかないと思います。子どもと子どもの絵の世界のありようを彼らの描画活動の分析を通して明らかにし、固定された子ども観を乗り越えようとする試み、子どもたちのイメージ力の現状を把握する試み、表現・鑑賞領域のリードの美的教育論からのとらえ直しが、以下の研究です。

「子どもはなぜ絵を描くか1」『大学美術教育学会誌』32号

「子どもはなぜ絵を描くか2」『大学美術教育学会誌』33号

「子どもはなぜ絵を描くか3」『大学美術教育学会誌』34号

「授業プログラム作成のための視覚イメージ力に関する研究1」『美術教育学』27号

「ハーバート・リードの「芸術による教育—再述」」宮崎大学紀要9

「ハーバート・リードの「芸術による教育」にみる鑑賞教育の視点」『美術教育学』25号

もちろん、教科教育学として、教育課程、教育目標・評価、教育方法、教材などについて考察していくべき視点は多いと思いますが、目の前の生の子どもの姿を見据え、「子ども観」を常に見定め、造形行為、造形表現の最前線を見据えていきつつ、美術教育の歴史を検証していく、双方の視点が必要不可欠だと考えています。先のゴーギャンの問いは、人間への歴史的視点からの問いでした。過去から現在へ至るベクトルを見いだせば、現在から未来へのビジョンが描けそうな気がします。しかし、美術教育学を成立させるためには、同時に、人間を瞬間に立ち合わせ、「われわれはどこからも来ていない われわれは何者でもない(もしくは、全てである) われわれはどこへも行かない」と言い換える視点が必要になるでしょう。また、「曖昧な存在であるが、既にある」という状況の認識は、人間の現実存在の気づきと本質存在の予感でもあります。その認識が、造形表現の原動力であり、造形表現によってより顕わになるならば、人間が人間になるために造形表現というマニフェストは欠かせないものになると考えます。

私見ですが、歴史性と非歴史性、ビジョンを描く必要性和ビジョンを描く無用さの両方を止揚させた時に、美術教育学は独自の学的基盤を備えたものとして立ち上がり、教科教育学としての美術科教育学が確固としたものとして成立するのではないかと考えています。

# 文献解題

学術文献の紹介と解説

\*\*\*\*\*

関 則雄, 三脇康生, 井上リサほか編

## 『アート×セラピー潮流』

フィルムアート社, 2002年 ISBN 4-8459-0240-0

平本佐智子 (元聖心ウルスラ学園短期大学講師)

\*\*\*\*\*

アートセラピー<sup>1)</sup>に関する文献の大半は、その専門家やそれを目指す学生向けに著されているが、この『アート×セラピー潮流』は、読者層を意図的に広く想定してあるといえる。それは、アートや美術教育に関わる私たちの知的好奇心を満たすような部分（ヒーリング・アートの再考や芸術家の病と作品との関係等）や、アートセラピーとは無縁の人にも受け入れられやすいベーシックな内容（成立までの歴史や方法等）からも、明らかである。

また、各著者の専門分野（アートセラピスト<sup>2)</sup>が半数、その他アーティスト、美術批評家等）や、専門教育を受けた国やセラピーの実践国（日本やアメリカ、ヨーロッパ諸国）が多様であることは、最大の特徴である。このことにより、現行の日本での芸術療法や癒しに焦点をあてた美術や音楽等の芸術行為（作品）の問題を客観的に指摘したり、アーティストとアートセラピストのような異なる専門家同士が向き合っただけでアートとセラピーについて語ったりすること（座談会）が、実現している。多領域の専門家がそれぞれの見解を述べることで、本全体を通しての主張に一貫性が見られないという部分はあるが、逆に現代のアートとアートセラピーの課題をより多くの観点から捉えることができるというメリットもあるといえる。

本書は6つの章で構成されており、第1章では「アート」、第2章以降は「アートセラピー」にそれぞれアプローチした内容である。章ごとにまとまった見解が論述されているわけではないため、基本柱となる1章から4章までの内容のうち着目すべき部分を中心に述べる。

第1章は、旧石器時代から現代までの美術作品（壁画や宗教絵画、ランドアート等）と、人間（アーティストや囚人、精神障害者等）の表現するもの（内面にある病理や精神性、宗教性等）についての解説である。統合失調症（非定型精神病説もある）を患っていたゴッホの自然をモチーフとする荒々しい筆触、神経症や被害妄想、アルコール依存症等の症状にあったムンクの「叫び」の中に見られる個人としての苦悩の表現は、その代表的な例である。特に、絵画に描かれている対象の象徴性の中からもたらされる癒しや、作品を制作する（表現する）活動による癒し、絵や表現の中におのずと表現される病理等に関する各著者の分析は、興味深い。

第2章は、アートセラピーの歴史や治療手段としてのアートの有用性（治療効果）と使い方（方法）、セラピーの対象者（患者）、セラピストの注意点等についての解説である。ここでは、海外におけるアートセラピストの「専門性」、「表現観（その過程も含む）」、「癒しの捉え方」という3つの側面に着目した。まず、その「専門性」である。アートセラピストには美術教師やアーティストを経た者、つまり治療として芸術を活用している人と、臨床心理学を専攻し心理療法のひとつとしてアートセラピーを行っている人がいる。前者は患者の生まれながらの表現スタイル（タッチや配色等）を重視し、素材を与えながら支えたり見守ったりする立場をとるが、自分のアートの力を患者に分かち与え、癒してあげたいという動機が高すぎる面があるという。後者は、作品の制作過程における言語を通しての治療のやりとりを重視し、アートは治療手段として捉えている。また、心理療法の学派の数だけセラピーの学派（フロイト派、ユング派等）も存在する。注意点は、アートに不慣れであるため、型にははまった治療構造（方法

や素材)になってしまうことである。次に、「表現観」である。治療過程におけるアートセラピストは、基本的に患者と対等の立場であり、信頼関係を築いてから表現活動へと促す。そして、患者が何か表現する前の段階には、表現への衝動や葛藤(幼少期以来言語化できずにいた気持ち)、インパクトといった内的なプロセスがあり、表現の途中あるいは終了時の作品にはどんな自己表現(作品)にも、何らかのメッセージや感情があるという立場をとっているのだ。最後に「癒しの捉え方」であるが、本当の癒しとは外から誰かによって癒されるということではなく、自己の存在の内側から得られるものだという。また、芸術行為のような表現と創造性だけでは癒しの体験は不可能であり、まず痛みを伴ってから得られる心の自由と解放が先にあって、そこから生まれる創造性こそ癒しにつながると考えられている。もちろん、アートセラピストの専門性や表現への考え方、治療観については学派や国によって違いがあるため、これらはひとつの考え方として位置づけるべきだろう。

第3章は、世界で活躍した10名のアートセラピストの人生と、その理論背景や実践についての解説である。創始者であるマーガレット・ナウムブルグや、アーティストと心理学者という二つの顔をもつカール・G・ユング等、国籍や職歴を問わない様々な活動が紹介されている。ここでは、フリードル・ディッカー・ブランデイズ[Friedl Dicker-Brandeis(1898-1944)]の功績を取り上げる。アメリカではアートセラピーの概念が構築されようとしていた頃、フリードル氏は、テレジンの強制収容所にいる何百人ものユダヤ人の子どもたちの傷ついた内面を、絵の表現を通して救おうと独自の方法を試みていた。この方法の根底には、フリードル氏がヨハネス・イッテンとフランツ・チゼックからそれぞれ影響を受けた、アートと美術教育に関する思想がある。このフリードル氏の実践した子どもたちへの癒しのアート(チゼックの誘導自発表現法を応用したしたもの)はセラピー史には残っていないようだが、苦境の中でも自由に表現することの大切さを唱え続けた氏の姿勢は、アートセラピーの精神に通じるものがある。

第4章は、海外の精神病院で行われているアートセラピーの現状の報告と、アーティストによる現代アートへの率直な問題提起が主な内容である。特に、アーティスト中ザワヒデキ氏がエイブル・アートやアウトサイダー・アート等の矛盾点を指摘しながら、「芸術の可能性を無制限に語るな」とする見解には、考えさせられる。美学的視点(アートという概念の枠組みをつくる立場)からいえば、アートはそれ以上でも以下でもないということだろう。芸術の中に癒し(治療)やそれ以上の可能性を見出そうとすること自体、ナンセンスなことなのだろうか。

アートセラピストと美術の実践者や研究者の考える「アート」の概念には、やはり質的な違いがあると思われる。しかし、なぜ「アート」という語が用いられるのかといえば、創始者マーガレット・ナウムブルグが妹である美術教育家の指導法に影響を受けたように、アートセラピー研究の原点にアーティストや美術教師、研究者等の存在や指導があったからではないだろうか。ただ、アートセラピーが発展する過程でアートという言葉の吟味することなく使用し続けたことで、「ヒーリング・アートは、アートセラピーの手法の模倣である」との見解のような、相互の批判が一部で生じていることも確かである。「アートはアートとして、セラピーはセラピーとしてそれぞれの自己分析を怠ってはならない」とする三脇康生氏(精神科医・美術批評家)のように、両分野に精通する人の見解こそ、今後ますます重要になるに違いない。

注1)注2)ここでのアートセラピーやアートセラピストは、あくまで海外の大学や養成機関で教育を受けた著者らの考えるものであり、現行の日本での「芸術療法」や芸術療法学会の認定する「芸術療法士」とは異なる部分があると、解釈すべきである。

服部 正著

## 『アウトサイダー・アート、現代美術が忘れた「芸術」』

光文社（新書），2003年，ISBN 4-334-03214-1

高橋智子（静岡大学）

\*\*\*\*\*

「トラウマという言葉がある」。 そんな書き出しで、本は始まる。

「トラウマ」と「アウトサイダー・アート」、一見、何の関係もない。しかし、著者の服部にとって「アウトサイダー・アート」は「トラウマ」を解消するために大切な役割を果たした。彼の「トラウマ」とは、幼い時の絵の記憶。自分が自由に表現した絵に対する周りの失笑が「トラウマ」になり、それがきっかけで絵が描けない子どもになってしまった。そんな彼が「アウトサイダー・アート」との出会いにより、「自分が信じる道を進むことの大切さ」を実感でき、その瞬間、図工や美術の時間が苦痛で仕方なかった子が自分の表現に自信が持てる大人になった。では「アウトサイダー・アート」とは何か、その問いが、本の中で読み手に投げかけられる。

「アウトサイダー・アート (outsider art)」という言葉は、1972年にイギリスの美術史家ロジャー・カーディナルが書いた著書の題名として登場した。「孤立した芸術 (isolated art)」や「生の創造 (raw creation)」など、アウトサイダー・アートと似たような言葉は多いが、今日一般的に使用されている呼び名は、「アウトサイダー・アート」である。それが一般に知られるようになったのは、1992年～93年に開催された展覧会「パラレル・ヴィジョンー 20世紀美術とアウトサイダー・アート」がきっかけであった。はじめに服部は「アウトサイダー・アート」を、①否定的で差別的な意味を持つ言葉ではなく、それらの作品を積極的に評価するものであり、②障害のある人が制作した作品という意味の言葉ではないと提言する。「アウトサイダー (outsider)」という言葉には、「部外者」「仲間外れの人」というような意味があり、ともすれば差別的な表現と受け止められるかもしれない。しかしアートの領域においては「アウトサイダー」であることが肯定的な意味を持ち、それは本来アートが持つべき自由さと奔放さを意味する、と著者は言う。作品の制作者が生きる社会の中で、制度化された美術の枠組みを突き破るような大胆な表現に対し、その言葉は用いられる。本書では既成の枠をはみ出してしまう自由奔放な表現としての「アウトサイダー・アート」が、歴史の中でどう発見・注目・理解され、価値を持ち、広まったのかをヨーロッパと日本の歴史およびその相違点を示しながら、実際の作品と作者を紹介しつつ読み解いていく。

「アウトサイダー・アート」の独自性を挙げるとすると、それは一代限りの積み上げのなさにある。その作品に歴史的な連続性は関係なく、それは無防備で意識的な戦略も持たず、もちろん社会的評価を求める姿勢などもない。だからこそ、そこには自由奔放で自然な表現があり、そのまじりけのない表現への衝動や執着が、美術の枠組みを超えて、人間の存在そのものに迫る問題を提起する。何にも寄りかからず自己主張する、そんな自己の充足のために向けられた自然な表現がそこにはある。

服部は最語にこう記す。『『アウトサイダー・アート』が私たちに与えてくれるもの、それは驚きをもって世界や人間を見つめる新鮮な心だ。』と。その見つめる新鮮な心を得た時、彼の「トラウマ」は解決する。「アウトサイダー・アート」を広めた画家のジャン・デュビュッフエは言った。「本当の芸術、それはいつも私たちが予想しないところにある」。それが「アウトサイダー・アート」であり、それに気づかせてくれるのもまた「アウトサイダー・アート」なのだと感じた。